

地域全体で

子どもの教育を支える島

沖縄県久米島町企画財政課

江口翔太

魅力化の発端は園芸科存続に向けた取り組み

沖縄県久米島町は、那覇市の西方約一〇〇キロメートルの東シナ海上に位置し、島の随所に優れた景勝地を有しています。歴史的、文化的遺産や風土景観にも恵まれ、島全体が県の自然公園に指定されています。令和六年一〇月現在の町の人口は七一六四人です。

島唯一の高校である沖縄県立久米島高等学校は、那覇・泊港からのフェリーが発着する兼城港かねしろのすぐ南東に位置し、目の前には美しい海が広がっています。一学年の定員は、園芸科四〇名（一クラス）、普通科八〇名（二クラス）の合計一二〇名ですが、近年では定員割れの状況が続いています。

もし高校が地域からなくなれば、中学を卒業した子どもた

ちは、進学のために島外へ出なければなりません。また、一人暮らしは経済的にも精神的にも負担が大きいため、子どもの進学に合わせて島を離れる保護者も出てきます。それはつまり、人口流出や伝統文化、コミュニティ、自治組織、郷土への愛着意識などの弱体化をもたらし、地域を衰退させる可能性が高まることを意味します。

平成二十一年に沖縄県教育委員会より「園芸科の廃科」の提案がなされたことをきっかけに、この状況に危機感を持ち、行政・高校・民間からなる「久米島高校を考える会」が立ち上がり、園芸科の存続と高校全体の活性化への取り組みが始まりました。これが「高校魅力化」として発展し、町が本格的に取り組み始めたのは同二五年のことです。

町の考える「高校魅力化」とは、高校環境をより良いもの

にして、子どもたちが「行きたい」、親御さんが「行かせたい」、教師が「赴任したい」、地域が「活かしたい」と思えるような学校にしていこうとする取り組みです。

地域に活力を与える留学生

平成二六年度より、「離島留学」として島外からの入学生募集を始めました。開始当時、久米島高校には学生寮が無かったため、まずは身元引受人の家庭に留学生在がホームステイする「里親制度」での受け入れからスタートしました。留學生の中には、島に住む親族や親せきが里親となるケースや、保護者も一緒に移住するケースもありました。

離島留学開始から三年目となる同二八年度四月に、町営寮「じんぶん館」が完成しました。「じんぶん」とは、沖縄の言葉で《知恵》という意味で、多くの生徒がここで切磋琢磨し、「じんぶん」を身につけ世の中に羽ばたいてほしいという願いが込められています。令和六年度は、全国各地からやって来た離島留學生二六名が寮に在籍しています。

これまでの離島留學生たちは積極的な生徒が多く、部活動を立ち上げたり、生徒会活動や校外探究活動を行なったりと、地元の生徒たちに良い刺激を与える存在となっています。また、地域催事に出店したり、地域清掃や伝統行事に参加する



令和六年度離島留學生「じんぶん館」入寮式。



など、島の住民の皆さんと触れ合う機会も多く、地域の活力につながっています。

学力、社会人基礎力の向上にむけて

寮の開所と同時に、町営塾「久米島学習センター」もじん

ぶん館へ拠点を
移しました（令

和二年町営図書館

「ほんのもり」一階
に再度移転）。塾

では、学校の定期
テストや大学

入試など生徒
個々のニーズに

応え、それぞれの
レベルに合わ

せた個別指導が
行なわれていま

す。運営は地域
おこし協力隊四

名の講師が担い、

各塾生に沿った学習ができる環境を整え、進路実現などに大きな役割を果たしています。

久米島学習センターの取り組みの一つが、ゼミ形式の授業「ちゅらゼミ」です。これは「学びにハマる」など、特定のテーマを設けて、グループワークやプレゼンテーションを行ないながら、伝える力や聴く力、問題解決の方法などを学ぶ授業で、進路選択や変化の激しい時代を生き抜くための「社会人基礎力」を身につけることを目指しています。

島全体の教育支援を見据えた塾の運営を

以下に、久米島学習センターの須崎悠貴塾長のお話を紹介します。

——久米島学習センター（以下、学習センター）は、久米島高校に通う高校生向けの町営塾です。久米島高校魅力化プロジェクトの「島の教育は島全体で応援する」という考えのもと、平成二十七年に高校の一角に設立されました。

当塾は、「学習指導」「キャリア指導」「高校連携」という三つの柱をもとに運営されています。学習指導では、日頃の定期考査対策から受験対策まで幅広く支援を行なっています。また、英検をはじめとする検定対策、キャリア指導なども実施しています。高校連携においては、おもに高校の進路指導

部と連携をとりながら、三年生に対する受験指導や放課後の自習室運営などを担っています。現在の利用者数は三〇名程度で、高校全体の約二割に当たります。

学習センターが存在することによる効果は、大きく二つあります。一つ目は、生徒に対して学習環境を提供できることです。久米島高校は、一九時完全下校ですが、学習センターは二時まで開講しています。そのため、部活動などを終えた生徒であっても、本人次第で十分に塾で学習する時間があります。久米島町には、都心のように放課後に立ち寄って勉強できるような場所がほとんどありません。その点、学校の近くに位置し、夜遅くまで開講している学習センターの存在意義は大きいはずで

す。二つ目は、進学希望の生徒に対してより充実したサポートが可能であることです。久米島高校の卒業生は、毎年度およそ約六割の生徒が大学や専門学校などに進学をしています。そのうちの約八割は、総合型選抜および学校推薦型選抜によって進路が決まりますが、これは、高校三年間の活動実績を活用して合格を勝ち取っている生徒がほとんどであることを意味します。学習センターでは、この点を鑑み、総合型・学校推薦型選抜の入試対策を行ったり、一年次から入試を見据えた活動実績を残せるように、検定取得を推進したり、課外活動へのサポートなどに力を入れています。学校の先生方

は、毎日の授業や校務などに忙殺されており、放課後の指導には限界があります。それを学習センターが補完することで、生徒のニーズに対応できているといえます。

学習センターの利用者の特徴は、大学や専門学校などへの進学を目指す生徒が多いことです。彼らは、学校内でも比較的に学力が高く、学習や課外活動に対する取り組み姿勢も積極的な傾向があります。

一方、学習に対する苦手意識が強い生徒や、家庭環境により学習したくてもできない生徒などがいるのも事実で、このような現状は、高校に限らず義務教育においても同様だと思えます。そのため、学習センターは「町営塾」として島の教育実態を捉え、その教育支援を高校から島全体へと視野を広げていく必要があると感じています。具体的には、高校において就職支援を実施したり、授業における先生の補助役として授業支援を行なうなどが考えられます。

令和五年度より進路指導部をはじめ先生方と連携する機会が増え、生徒への学習指導やキャリア教育という面では、足並みが揃ってきた感覚があります。しかし、高校魅力化プロジェクトとして、どのように島の子どもたちに支援していくかについては、まだまだ議論する余地があります。地域全体が島の子どもたちの未来を考え、応援するという当初の構想に立ち返る必要もあるのかもしれない――。

島を想う人材の育成に向けて

じつは筆者自身も久米島町の離島留学制度を利用し、久米島高校で三年間を過ごしました（平成二九年度卒業。中学まで



「キラ人講話」で地域の方を講師に招いてのキャリア教育。

福岡県で過ごし、高校から親元を離れて一人で沖縄の離島に行くことに、期待と不安の両面がありました。が、まったく違う環境で生活してみたいという思いが勝り、久米島高校進学を決めました。

三年間のうち、最初の一年間は里親さんのもとから通学し、残りの二年間はじんぶん館で過ごしました。久米島高校は、生徒数こそ少ないですが、勉強しやすい環境だと感じたことを覚えています。先生や生徒同士の距離が近く、コミュニケーションを取りやすいことも居心地がよく、充実した学校生活につながったと思います。

里親さんの家や寮での生活では、人への気遣いや他人への思いやりなど大事なことを学べました。高校生活の三年間で、たくさんの貴重な経験と仲間を手に入れることができ、今の自分の人生に大いに活かされていると感じています。里親さんや寮の仲間、寮のスタッフの皆さんはもちろん、地域のすべての方々に感謝しています。

また、久米島高校では、生徒のキャリア教育につなげるべく、「キラ人講話^ど」として、町内外で活躍されている方を講師として招き、講演していただいています。リアルな人生経験を聞くことで新たな視点を取り入れ、アドバイスもいただける場として、生徒一人ひとりが自分の進路や生き方を考える貴重な機会となっています。これまでの講師は、島出身の大

— 学校長からの言葉 —
生徒・学校・地域のための
魅力化プロジェクト

久米島高校の基本的な教育方針について、離島でも沖縄本島や本土の子たちに負けないだけの力をつけて送り出していこう、という考えのもと学校を運営しています。部活動などは、活動をする上での制約もありますが、学力や生活態度は、離島だからというハンデが無いように取り組んでいるところです。

久米島高校に入学する生徒は、小さいころからともに過ごしてきた島内生に、島外から親元を離れたきた離島留學生が加わります。お互いに当たり前だと思っていたことが覆るようなことも日常茶飯事です。出会ったばかりの時期は、意見がぶつかったり距離を置かちになることもあります。徐々にお互いの良さを理解し、尊重し合う姿が見られるようになります。

離島留學生たちは、家族から離れて久米島の方々と接することで、人のありがたみを地元にいる時よりも深く感じているように思います。実家暮らしで親が家事をしてくれて、自分は帰宅したらご飯を食べて寝る、という生活をしている高校生は多いと思いますが、離島留學生は自分のことは自分で行なう生活を送っています。彼らの姿を島内生たちが見ることで、良い刺激になっているようです。久米島へ送り出す親御さんの不安は大きいとは思いますが、自立した生活は卒業後に大きな力になってくれるでしょう。

じんぶん館での生活において、寮生同士で衝突することは、時には必要だと思います。学校でも同様ですが、生徒たちそれぞれに個性があり、各々の考えがぶつかることは、彼らの人間力の形成に役立ちます。

学習センターでは、地域おこし協力隊の方たちが塾の先生として、いろいろなことを教えてくれています。彼らの人生経験を話してくれたり、学校の先生ではないからこそ相談できることもあるのだと思います。われわれ教師とともに、面接や小論文の指導もしていただけるのは、非常にありがたいことです。また、時には子どもたちの心のケアなどにも気を遣ってくれており、思春期の高校生の生活指導や面倒を見るのは本当に大変なことだと、とても感謝しています。

現在、魅力化プロジェクトは、さまざまな立場の方たちがそれぞれの思いで活動されているように感じます。それらをつないで、久米島の子どもたちや、久米島高校のためになる魅力化とは何なのかを考えていきたいです。

(沖縄県立久米島高等学校校長 阿波連 守)

学生や専門学生、農家や社会福祉士として活躍されている方々などで、職種や業界は多岐にわたっています。筆者自身は、高校卒業後、沖縄本島の大学へ進学しましたが、これらの経験から久米島のために仕事をしたいと考え、卒業後に島へ戻り、現在は久米島町役場の職員として勤務しています。

高校の生徒数の減少になかなか歯止めがかからない中で、「久米島で学びたい」という子どもたちのため教育の機会や質を守ることは重要です。今後も島全体で子どもたちをサポートする環境づくりについて活発に議論し、高校魅力化の取り

組みを継続していきたいと思っています。離島留學生に限らず、高校魅力化の取り組みによって、久米島高校の卒業生たちはそれぞれの場所で活躍しています。将来、久米島に戻って地域のために働きたい、という卒業生が一人でも多く出てきてくれれば嬉しいです。

江口 翔太 ぐんちしやうた

久米島町企画財政課。平成一二年福岡県福岡市生まれ。平成二七年より久米島高校に離島留學したことを機に、大学卒業後、令和四年に久米島町役場入職。移住・定住や空き家利活用の促進に取り組む。趣味はスポーツ観戦。